

忘れてはならない教訓 羽越水害の記憶／応募手記

家具も思い出もすべて 流されてしまった

大江町：鈴木 喜一郎

とにかく気が動転していて、覚えていないことも多いですが、家が浸水したのは雨が止んでからのことでした。

今のように情報伝達がうまく行き届かなく、町民たちは雨が降っていない大江町がまさか洪水の被害に見舞われるとは思ってもいなかったと思う。

早朝から次第に川が増水し始め、みるみるうちに我が家まで水が押し寄せ、慌てて一階のものを2階へと運んだが、すべての作業が終わらないうちにあっという間に一階は水に浸かってしまい、家の中はまるで、海のようだった。

つちかべ 土壁は落ち、波で戸はずれ、家具は流され、さらに水かさが増すと床が上がってきた。

家が浸水してからは、大事なものを持ち出すことよりも、逃げることで精一杯で、家から逃げ出すときは水中を潜って外へ出た。

平屋の家では屋根まで水に浸かり、家ごと流されそうになり、家の柱と電柱をロープで結んだところもあった。

翌日は随分水が引いていた。家に戻ると残っていたものは、泥と残骸。川は汚水のため、非常に臭く、とても乾きにくかった。

写真や、卒業証書、五月人形、思い出の品はすべて流されてしまった。

水をかいて泥を流そうとしても、まだ外にも水や泥が残っていたため流しきれない。道路には泥まみれになった荷物や家具が出してあり、それを片づけるのも大変だった。



消防ポンプ車も出動し、上流にある住宅から泥を流したが、下流にある私の自宅までくるのにはかなり時間がかかり、非常に難儀した。

親戚がスコップを持って手伝いにきてくれたり、おにぎりを作ってくれたり、寝泊まりもさせてくれたりと、いざというときはやっぱり血筋が頼りになると実感した。数日後、婦人会でも水が引いてからに汚れた皿洗いや、家の中の掃除にきてくれ、大江町の役場でも、被害のあった住宅を消毒してくれました。

当時私は土木関係の仕事をしていましたが、役場の方に誘われ、大江町の被害写真を撮りに行き、その写真を持って寒河江出張所へ被害状況を報告を行った。

昔の生活用水はほとんど川の水でまかなっており、最上川には大変お世話になつたが、こんなに恐ろしいことを引き起こす一面もあるのだと、身をもつて体験した。川は本当に大事にしていかなければと思った。

あの時は夢中で逃げることしか考えていなかったが、今思い返すと、あのときの最上川の水音を思い出すだけで恐くなる。

この羽越水害は私にとっても、家族にとっても一生忘れられない体験だ。幸い、けが人はいなかつたようだが、二度と体験したくない。

忘れてはならない教訓 羽越水害の記憶／応募手記

ただ、呆然と見ていたのを鮮明に覚えている。

長井市：菅 貞雄

28日の夜11時30分頃、「今晚は、今晚は」と女人がけたましく私の家に駆け込んできた。最上川の堤防と福田川の堤防に囲まれた南角の手塚よのさんだ。すぐに玄関を出たら「私の家の畠の下まで、水が上がってきた、今すぐ家財道具を公民館に運んでくれ」と呼んだ。「よしわかった、消防団員を集めて、すぐに行くから私の家で待っている」と言ってハッピを持って近くのポンプ車脇の警鐘台に登り早鐘を打った。昭和42年8月、ようやく稲の穂が頭を垂れ始めた頃の深夜であった。

当時は、前年3月当時の消防団の部長に就いたばかりだった。又農協青年部の支部長もやっており、前日から先輩の鈴木さんと地域内の水路と田んぼの見回りをやって強雨を心配していた矢先だった。団員皆で、手塚さんの主要な家財を公民館に運び終わりポンプ車で一休みしていた頃、29日の空が白みはじめた。

手塚さんの家族は女ばかりの3人家族なので公民館に避難してもらいい、団員皆ほつとしていた時、県道(現国道287号)を南の方からきたトラックがポンプ車の前で突然止まり「橋が落ちて車が通れない、白川の水がすごい勢いで流れている」と言って町の方へ戻っていった。皆がびっくりして“行ってみんべ”と白川橋へ行って見たら驚いた。一番北のほうのコンクリートの橋脚が倒され橋板1スパンが川の中に倒されていた。

団員に「これから何が起るかわからない、まず自宅で朝食をとり、7時にポンプ車庫で待機だ」と言ってひとまず別れ、自宅の前で東側の堤防を見ていたら、堤防際を白い波を立てて恐ろしく大水が流れてきた。ただ、呆然と見ていたのを鮮明に覚えている。それからが大変だった。集落の人たちも自分の家を守ることが精一杯で、よその家の事などかまつていられない。前夜の手塚さんの東隣にもう2軒あった。私たちの地域は、東の最上川の方にゆるやかに傾斜していて、最上川の堤防は、昭和8年に福田川堤防は昭和39年代泉構造改善事業と並行してようやく完成したばかりだった。堤防にはもちろん、それぞれの水路毎に樋管はあったが、河川の水位が高く、排水が効かず、かえって逆流してくる状況だった。残り2軒は、住宅の屋根だけが、濁水に浮いているようだった。警察官もきたので、「堤防をきて水を流すか」と言ったら、「だめだ、かえって流れが早くなり危険が増す」と言うので、皆に「二手に分かれて中の大切なものを取り出せ、人はいないと思うが」と命令し、私も濁流の中の玄関の鶴居を潜って家の中に入つてみた。佛壇の位牌などが浮いていたので、2、3点持つてかろうじて泳いで上手に上つた。それ以上の家具等はもちろん、取り出せなかった。幸い2家族全員無事で避難していたのは、不幸中の幸いだった。それ以上、手が回らないので、ひとまずポンプ車に引き上げ、水が引くのを待つより仕方なかった。

そういうふうに、次々と情報が入ってきた。

白川橋上流の排水樋門が水勢で破壊され、堤防外を濁流が走ったとの事。当時、私達の泉地区は3集落で130戸程だったが、羽黒集落には神社もあり、最上川の堤防沿いに7、8軒の住宅があったのでその付近の状況も確認を急がなければならなかった。水位は私の福田集落の被害住宅より浅かったので全員避難していて大丈夫のことだったが、部長としての責任感もあり、膝上まで水につかりながら家々を点検した。

ところが床上浸水した一番南の家に行ってみたら、遠藤ゑつさんという70才位の女性が、椅子に腰掛け居間にいたのである。

「どうして逃げないのだ」と声をかけたら、「水の中が恐くて歩けないので、水が引くのを待っている」と言う。

いつ水が引くかはわからないので、私がおぶって近くの親類に連れて行った。

この日、白川橋南の方で今泉駐在所の巡回が白川の水に流され河原の柳の立木につかまって、かろうじて助かっている。当地域では人的被害は避けられたが、この羽越水害で県下で8人が亡くなっている。

翌30日ようやく水が引き、保健所からも職員が来て泥水が上がった住宅内と、井戸を洗つて欲しいとの要請を受けて、団員一同ポンプ車で住居を洗い流し、井戸を洗浄し石灰を保健所の職員がまいた。私は消防団員として20数年いろんな火災現場や水防訓練にも出向いたが全く思惑違いの未曾有の大水害であった。

9月になり、自分の持ち田が堤内にあったので確認にいってみたら、積んでいた稲坑は全部流されており、稲はべったり倒立して泥にまみれていた。泉地区の守護神の羽黒神社境内の高さまでの水位で難を免れたがお祭りは中止となった。

被害地の稲刈りは当時は手刈りだったので、市内の生産団体、農協青年部員の方々にご奉仕により刈り取りをしていただいた。改めて厚く御礼申し上げます。

羽越水害から40年を経過した今日、置賜管内では水津ダムをはじめ、白川、長井、横川ダム等々のダムも完成し、万が一の洪水に備えて貯水、流量の調節に貢献され、私達農業者はもちろん、流域に住む人達に安全、安心に大きく貢献している事に心から感謝を申し上げたいと存じます。



今まで生きてきた中で、一番恐い水害

南陽市:青木 あやこ

私の住んでいた南陽市関根地区は、雨が降ると水増しの心配があるところで、8月28日も一日雨が降っており、私の家も浸水しました。

家族で「わーすごいー水がだんだんあがってくるよ恐いー」なんて言っているうち、気づいたら自分の家も浸水していたというような感じでした。

ちょうど最上川を挟んで向こう側が被害の大きかった川西町です。

昭和42年の羽越水害時、高校生だった私は、どうすることもできずただただたち尽くす傍観者でした。父や母や兄はとにかく慌てて一階の家具などを二階に運んでいたと思います。

昔は堤防が今のように頑丈ではなく、松川が溢れて、幸来橋付近まで一面海のようでした。

実家の1階が浸水し、渡し舟で2階から出入りした記憶があります。それから3日間くらい、水が引かず、2階で生活しました。

水が引いた1階は、すべてが泥だらけでした。さらに、昔のトイレは外にあったため汚物が流れてきたり、近所に家畜を飼っていたところもあったので、ものすごい悪臭でした。家畜も流されました。

高校のクラスメイトで、川西町の東大塚に住んでいる男の子がいましたが、

その子の住む地域は私の住む関根よりももっと窪地だったため、家ごと全て流れてしまいました。

もちろん学校にも来れず、気の毒に思い、クラスで話し合い、みんなでいくらかお金を出し合って、その男の子の教科書を買った記憶があります。

仲の良かった友達は南陽市梨郷の高台に住んでいたのですが、彼女の家の下をちょうどフランカー長井線が走っていて、梨郷駅から西大塚駅までの線路はすべて水に浸かってしまったそうです。

今改めて考えてみると、一面海になった状態が鮮明に思い浮かんでくる。本当に向こうの山の麓までの景色が海にしか見えなかった。

まだ、高校生だったため責任感もなく、学校が休めるなあくらいにしか考えていなかったが、水が引けてからどうしようか、家具を買い換えるかなど考えたり、あと片付けをしていた両親はすごく大変だったと思います。このような体験はもう二度としたくないです。



忘れてはならない教訓 羽越水害の記憶／応募手記

別の町に着いてしまったかのように あたり一面海でした



山形市:松田 美智子

羽越水害が起った40年前は東京の大学に通っていましたが、私の実家がある大江町左沢が洪水で大変なことになっていると、家族に呼ばれ東京から大急ぎで帰ってきました。

東京から電車に揺られ、左沢につくと、別の町に着いてしまったかのようにあたり一面海でした。実家は1階部分が浸水し、家具や畳などは知人たちと協力し合い、大半を2階へ運んだため物品の大きな被害はありませんでしたが、かまどなどが流されてしまいました。

私がまだ小学校に通っていたときは、梅雨の時期になると洪水がおき、学校を早退するなどということも年に何度もありました。そのように大雨が降るようなときや、浸水の恐れがあるときは消防団が見回りに来たりましたが、この羽越水害時はあっと言う間に水がどんどん上がって消防も見回りをする時間などなかったそうです。

当時は井戸水を使用していたため、泥水が流れ込み、水が使えなくなりました。次の日、水はひきましたが、洪水が通り過ぎた後の我が家は見るも無残でした。汚水で家は臭いえ、大きな木が流れこんだりもしていました。

知り合いが特殊な機械を持っていたため、泥水を吹き飛ばしてくれ、あとは家

の床を白い粉のやうなもので消毒をしてもらったのを覚えています。町の職員の方や、消防関係の方の対応がとても良く、積極的に活動してくれました。

羽越水害以外でもたびたび浸水はしていましたが、42年の水害が一番ひどかったです。家族に怪我がなかったことは何よりの幸いでした。

お盆に毎年開催されるとうろう灯籠流して、花火を見る場所として私の実家は絶好の位置もあり、普段は穏やかで自然豊かなあの川が姿を変え、あのような大きな被害をもたらしたのだと思うと、何ともいえない怖さです。